

調査研究報告書

中島萌奈美

1) 調査研究テーマ

フッゲライをきっかけに、ドイツと日本の福祉について

2) 調査動機

現在日本は高齢化が進み、2015年には女性の2人に1人が50歳以上になるのではないかというデータもある。このような社会で重要なことは、福祉を充実させることだと考えられる。頭の隅で日本の福祉制度について考えていた時に、アウクスブルクの市内視察でフッゲライの福祉施設を訪れ、ドイツの福祉について少しだけだが触れることができ、とても印象に残ったため。

3) 調査報告

フッゲライの福祉施設

使節団としてアウクスブルク市内で1番最初に訪れたのがフッゲライの福祉施設だった。貧民救済のために、当時金融で大成功していたフッガー家が建設し、恵まれないうアウクスブルク市民に向けて建設以降変わらない、格安の家賃で提供されていることを知った。1年間で1ライン・グルデン（現在0.88ユーロ）と、フッガー家のために毎日3度お祈りを捧げることが家賃とされている。現在まで使われている社会住宅としては世界最古である。敷地の中には140

のアパートがあり、現在は150人が入居している。



フッゲライの中にある聖マルクス教会
入居者は皆カトリック信者だった



67軒の長屋が並んでいる

わたしたちは、フッゲライ入り口からヤコーバー通りを歩いた。実際の家の中は無駄なスペースがなく、シンプルな住居だったが、わたしの中で「最低限の生活」と聞いてイメージしていた冷たさや、ギリギリを生きている切迫感のようなものは全く感じられなかった。体重をかけたときに最も安定するという3本足のいすや、虫除けの役割を持つ天蓋つきベッド、寒さの厳しい

冬に外へ出なくても部屋の中から半自動で開けることができる玄関ドアなど、しっかり意味を持ったものが多く、感心した。シンプルながら工夫が凝らされていて、生活の本質をついているなと思った。



この小窓から外の来客を見て、部屋の中からレバーを引いて開けられる玄関ドア

フッゲライのホームページもあり、ドイツ語をはじめ、イタリア語、フランス語、スペイン語、チェコ語、ロシア語、スウェーデン語、中国語、日本語の各国語版が用意されている。施設内にあるパンフレットも同様で、幅広い言語版が揃えてあって、観光地としてもすばらしいと思った。観光客向けで、歴史的な文化財としても有名な場所ならではのことである。

創設者のヤコブ・フッガーは、入居者が人からのお恵みによって生きていくのではなく、自活していくための援助のためにこの施設を建てたといわれている。また、食事は全員集まって取っていたが、例え足が不自由でも杖をついたり、車いすに乗ったりと何とかして動いていたという。頑張っただけで動くか、病人扱いをされるかのどちらかであった。どちらのエピソードも、可能な限り自分で動く「自立」に基づいている。

カトリック的な考え方で、現在でもこの「自立」を軸に人々が暮らしている。

フッゲライの社会住宅の入居者の多くは高齢者であることから関連し、日本の老人ホームと比較してみたい。高齢者が入所する有料老人ホームだけでなく、現在では低所得の高齢者のための施設もつくられている。フッゲライとの違いは、日本の施設では住居であること以上に、まず介護や医療サービスを十分受けられるか、または提供できるかを重要視している点である。健康体であったとしても、施設に入る＝身の回りのことは誰かが世話をするという考え方がドイツよりも強いように思える。

高齢者に限らない低所得者向けの住宅は、様々な条件の下、補助金をもらって入居する場合や、地方公共団体が低所得者向けに安い家賃で貸し出す公営住宅がある。フッゲライのように、もともと貧困者向けに建てられた、独立した家のような福祉施設は少ない。また個人が建てた施設は規模が小さく、戸建ての家を改修したようなところもあり、共同生活が基本だ。



それぞれの家に違う形の呼び鈴の取っ手
夜遅く帰宅して、電灯がなくても取っ手の形で自分の家を見つけた

貧困者への救済という視点から、ドイツでは日本よりも生活保護手当を受ける人が少ない。生活保護手当は、失業手当などとは違い、様々な条件をクリアすると一生もらうことができる。月払いの生活保護手当に加え、家賃と暖房費、健康保険なども国に賄ってもらい、ベッドやテーブルなどの家具、電子レンジやコンピュータなどの電化製品も現物支給される。ドイツではこれらの費用を、19%の消費税で賄っている。また職を失った人には無料で職業訓練をさせており、ドイツは手厚い福祉制度とできる限りのことを自分で行う「自立」を両立させていることが伺える。

日本では、日本国憲法第 25 条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という条文に基づいて、経済的に困窮している国民に保護費を支給している。ドイツのように現物支給などではなく、金銭的援助が主である。この中には住宅扶助や教育扶助が含まれている。高齢世代の受給者が多いが、それは年金のみでは生活できないためである。

アウクスブルク市立新図書館

アウクスブルク滞在 2 日目には市立新図書館を訪れた。カラフルな内装と、本・DVD・CD 貸し出しの充実で、日本の図書館よりも「来たくなる図書館」だと思った。書籍も各年齢向けで分けられている点や、催し物のインフォメーションが多いことなどから、市民にとって利用しやすく、憩いの場になっていると思った。さらに、ドイツの本だけでなくイタリアやスペイン、フランス、ロシアなど外国語の本も多く取り揃えられ

ていて、日本とは大きく違う点だった。島国が、陸続きかによって外国人の比率も違い、それに合わせて図書館も展開されていると考えられる。

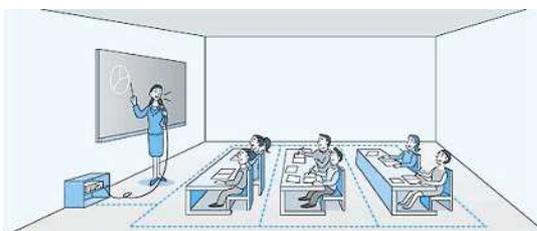


ここは幼児向けのコーナーで、本を持ってゆっくりくつろげるマットもある

難聴の人が少しでも聞き取りやすいような防音性の高い部屋の設計になっているなど、聴覚障がい者への対応もすばらしく、フッゲライの住宅地に続き、ドイツは福祉がしっかりしていると感じた。

日本の図書館でも、手話ができる職員をおいたり、フラットループと呼ばれる磁気を利用した補聴支援システムが設置されているところもある。これまでは目が見えて本が読めるのなら特別なサービスは不要とされてきたが、日本の図書館は住民の学習権を保障する場であるため、最近では聴覚障がい者へのサポートが充実してきたと言われている。聞こえないということは、言語能力の発達に大きな影響を及ぼすため、手話や字幕の入ったビデオ等の映像資料も用意されている。他にも例えば大阪府枚方市の図書館では、聴覚障がい者サービスとしてマンガの貸し出しを行っている。単語や文章の理解が難しくても、絵や形、表情と、吹き出しに出てくる言葉をつなげれば、

その内容を理解できるからだ。



フラットループ

(イラストは、リオン株式会社 磁気ループ補聴システムより)

ドイツでは Urheberrechtsgesetz (著作権法) の 45 条に、知覚障がいにより作品の理解ができない人々のために、利益を目的としない作品の複製が認められている。

聴覚障がいは視覚障がいよりも、見た目での判断が付きにくく、見逃してしまいがちだが、福祉を考えるうえで、難聴によって生活しづらい人々のサポートも非常に大切である。

盲導犬

ドイツの町を歩いていると、日本で生活しているときよりも、盲導犬を連れた人を多く見かけた。トラムの中でも、盲導犬がしっかりとパートナーを椅子に導き、犬もその横でおとなしく伏せていた。

日本では将来盲導犬の候補となる子犬を、一般家庭で愛情をかけて育てるパピーウォーカー(子犬の飼育委託)が有名だが、もともと盲導犬文化はドイツが発祥だといわれている。1800年代前半に、ドイツ人の神父が2匹の犬の首輪に細長い棒をつけて訓練し、案内に成功したことが始まりだ。1900年代前半には、ドイツで失明した軍人のた

めに盲導犬訓練学校が設立された。その他ヨーロッパの国々では早くから盲導犬の育成が始まっていた。ドイツでは現在およそ1800匹の盲導犬が活動している。

日本では1938年に盲導犬を連れて旅行していたアメリカ人の青年が日本に立ち寄り、講演をしてまわったことが最初である。翌年にはドイツで訓練された4頭のシェパードが輸入された。1950年ごろに盲導犬第一号として「チャンピイ」が訓練された。その後厚生省の許可を受けて日本盲導犬協会や盲導犬訓練所が建てられた。法的にも、車両の一時停止や徐行といった道路通行上の保護を受けたり、バスやタクシーへの乗車が認められたりした。そしてホテルや旅館、飲食店など、盲導犬が同伴できる場所が増えていった。



国内で1年間に育成・供給される盲導犬は100頭ほどである。しかし盲導犬の使用を希望する人は多いものの、それに伴った育成が追い付いていないのが現状だ。日本には訓練士の数が少なく、施設も少ない。また1頭あたりに高額な育成費がかかるなどの経済的な理由もある。さらに盲導犬になるには様々な適性検査があり、育成した犬すべてが盲導犬として活躍できるわけで

はないことも、日本での盲導犬のさらなる普及が難しい要因だ。それでも、ヨーロッパ諸国のように、視覚障がいをもつ人が安心して盲導犬と共に歩く社会を目指してほしい。

最後に

アウクスブルクでフッゲライの福祉施設を見学できたことは、ドイツと日本の福祉について深く考えるきっかけとなる素晴らしい機会となった。一般的にドイツ人と日本人は似ているといわれるが、福祉の面でもドイツと日本は類似している点が多かった。また日本がドイツの制度や仕組みを参考にしていることもあり、ドイツはレベルの高い福祉国家だと思った。これからもドイツ、日本、世界が、誰にとっても暮らしやすい社会を目指し、福祉の充実に取り組んでほしい。

4) 参考文献

- ・厚生労働相 生活保護制度

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/eikatuhogo/

- ・障害保健福祉研究情報システム

http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prd1/jsrd/rehab/r082/r082_014.html

- ・聴覚障害者とマンガ 枚方市立図書館のとりくみ

<https://www.city.hirakata.osaka.jp/site/sub-annai/use-manga.html>

- ・日本盲導犬協会 盲導犬の歴史

<https://www.moudouken.net/knowledge/history.php>

- ・世界最古の社会住宅 フッゲライパンフレット

- ・マンションの歴史ドイツのフッゲライ

<http://apartmenthouse.biz/fuggerei.html>

- ・盲導犬による視覚障害者の歩行支援

www.iatss.or.jp/common/pdf/publication/iatss.../28-1-07.pdf

- ・リオン株式会社

<http://www.rion.co.jp/products/communication/com15.html>

写真撮影：中島萌奈美 本人